Journal of History for the Public, Vol. 2, 2005, pp. 38-59
The Images of the Japanese and the Chinese in Early Modern Europe: Physical Characteristics, Customs and Skills
A Comparison of Different Approaches to the Cultures of the Far East
Walter DEMEL

近世ヨーロッパにおける日本人と中国人のイメージ：身体的特徴・習俗・技術

――極東の文化へのさまざまなアプローチの比較――

ヴァルター・デーメル
中村武司（訳）

はじめに

日本人や中国人にたいしてヨーロッパ人が抱いていたイメージの記述は、さまざまな側面を持つ問題である。むろん、この文脈において「イメージ」という言葉は、真実の正しい描写（あるいはその複写）というよりも、不正確でゆがめられた描写を意味する。このイメージは、多くの点で、同時代のヨーロッパ人たちが、かれら自身をどう見ていたのかを映しだしているかもしれないが、他の点ではその正反対のものも示している。そのうえ本稿では、身体的特徴、それに習俗と技術という 3 点にしぼってわたしは論じていくので、ここで言うイメージは不完全なものでしかない。多くの旅行記や宣教師たちの報告書は、中国や日本における政治的・宗教的状況に焦点をあてている。しかしながら、われわれが「国民的特徴」と呼ぶものは、政治体制や支配的な宗教にとって根本的に重要なものだとしばしば考えられてきたのである。

ヨーロッパ人が認識した中国人と日本人の身体的特徴

ヨーロッパに伝えられた中国人と日本人の外見についての最初の記述は、ヨーロッパ人が抱くイメージに長いあいだ影響を持ち続けた。1515 年に書かれた手紙のなかで、イタリア人コルサーリは、中国人のことを次のように記している。「かれらは少し粗野な外観を持ち、小さな目をしているが、とても勤勉であり、われわれによく似ている」。1547 年には、ポルトガル人船長ジョルジュ・アルバーレスは日本人のことを、「多くの人びとは中背で、重労働に十分な頑健で強い肉体を持っている。また、白人のような魅力的な容貌をしている」と述べてい

る。[1] アウグスティノ会の修道士、ゴンザレス・デ・メンドーサは、16 世紀で広く使われた中国の関連文献を編纂したが、たとえばそのなかで、中国人についてはまったく同じような記述しており、日本人については禿頭かほとんどそれに近い髪型を好むと述べつつも、中国人は日本人によく似ていると記している。[2] 東アジア人の特徴は、スリムで、大きな目と高い鼻を持ち、立派な顎髭をたくわえているという、メンドーサ（と当時のヨーロッパ人）の考える完全な美のイメージには一致しなかったことは疑いようがないが、それでもやはり、メンドーサはかれらのことを、壮健で魅力的な外見を持つ人びとだと記している。[3]

ヨーロッパ人著作家たちはみな男性であったためもあって、東アジアの女性にはさらに好意的であった。たとえば、イエズス会士セメドは、25 歳から 30 歳までの年齢の中国人女性は美しいと述べている。ただし、その年齢を過ぎると醜いと述べているが。1656 年のオランダの中国使節団の一員であったヨアン・ニウホフは、とくに上流階級の若い中国人女性は、適度の食事しか摂ることを許されておらず、それがかれらを美しくスリムにしている理由であるとして、その美貌を説明している。しかしながら、ヨーロッパ人は、中国人貴族が好んだ爪を長く伸ばす習俗だけでなく、できるかぎり小さくて華奢な足を保つための、幼児期の纏足の習俗——少なくとも、上流の家庭においては——に驚いている。[4] しかし、マテオ・リッチでさえもこの習俗を考察して（これについては、ニコラ・トリゴも論じているが）、一般的に纏足が女性たちの歩行を難しくしており、賢明な男性が女性を家から外に出すのを防ぐために考えつい

---

(1) Gian Battista Ramusio (ed.), *Navigationi et Viaggi I-III, Venice 1563-1606*, Mundus novus, 1st ser., vols II-IV (Amsterdam, 1967-1970) I, 180（280 頁というのは誤り）所収の 1515 年 1 月 6 日付けの書簡をみよ。原文は以下の通り。‘[...] gli huomini sono molto industriosi, & di nostra qualità, ma di piu brutto viso, con gli occhi piccoli’. また、J. アルバーレスの見解は、Peter Kapitza (ed.), *Japan in Europa. Texte und Bilddokumente zur europäischen Japankenntnis von Marco Polo bis Wilhelm von Humboldt* I-III (München, 1990) I, 63（以下、Kapitza, *Japan* と略記する）から引用した。原文は、‘meist von mittlerer Größe, untersetzt und sehr kräftig für die Arbeit; ein weißes Volk von gutem Aussehen’。

(2) 以前の日本人は髪を引き抜いていたのにたいして、豊臣秀吉の時代以降、剃刀で頭を剃るようになったと宣教師ロドリゲスは報告している。Michael Cooper, *They Came to Japan: An Anthology of European Reports, 1543-1640* (London, 1965) 37.

(3) Joan [Juan] González de Mendoza, *Historia de la cosas más notables, ritos y costumbres del gran reino de la China [1585],* ed. by Felix Garcia, *España misionera* II (Madrid, 1944) 37 [長南実・矢沢利彦訳『シナ大王国誌』（大航海時代叢書第 1 期第 6 巻）岩波書店、1965 年]. メンドーサは東アジア人のことを「とてもすぐれた肉体的素質を持ち、姿かたちもよく、上品である de muy buena disposición de cuerpo, bien sacados, gentiles hombres」と記している。

(4) Alvaro Semmedo [or Alvarez Sem(m)edo], *Imperio de la China i cvltvra evangelica en èl, por los Religiosos de la Compañia de IESVS*, ed. by Manvel de Faria i Sousa (Madrid 1642) 35-36 [川名公平・矢沢利彦訳『中国キリスト教布教史』第 2 巻（大航海時代叢書第 2 期第 9 巻）、岩波書店、1983 年]; Joan Nieuhof, *Het Gezantschap der Neêrlandtsche Oost-Indische Compagnie, aan de grooten tartarischen Cham, Den tegenwoordigen Keizer van China [...]* I-II (Amsterdam, 1665) II, 56-57. Cf. Folker E. Reichert, *Goldlilien: Die europäische Entdeckung eines chinesischen Schönheitsideals*, Kleine Beiträge zur europäischen Überseegeschichte, issue 14 (Bamberg, 1993). ライヒェルトは、小さな足が密かに「性欲をかきたてる記号としてだけでなく、高貴な家で育てられたことを示す特徴」として見なされたと指摘している (ibid, 11 からの引用)。日本においては、この習俗の模倣はごく限られていた。

たものとしている。わたしの知るかぎりでは、穏やかで安心という意味の漢字は、たしかに「女」と「家」を示す部首から構成されている。いずれにせよ、この賢いやり方は、あるヨーロッパ人たちから非常に高い賞賛を受けたものだ。[5] 日本人女性は「よく整った体つきと、とても白い肌を」しており、「とても親切で穏やかな」人びとであると描かれている。さらに、処罰される理由がなくとも、ごく些細な誤りを犯しただけで夫が妻たちを殺すことができるので、日本人女性はとても優れた主婦であると一般に考えられたのである。[6]

中国人と日本人が「白人」であると考えられたという事実は、とても重要な結果をもたらした。濃い肌をした、たとえばインド人にはあてはまらないが、中国人と日本人の場合では、イエズス会監察使ヴァリニャーノは、その土地出身の神父を養成することも含めた、現地への適応（順応）という考えにもとづく宣教戦略を嘆願しているほどである。[7]

しかしながら、広東省に住む中国人は、むしろ茶色がかった肌をした人びととして描かれていた。ヨーロッパ人は長いあいだ、赤道から遠く北に住むにつれて、人間の肌の色は薄くなると信じていたので、[8] とくに中国中央部に住む人びとは、黄色の肌をしているといわれることもあった。つまり「白色」と「茶色」のあいだというわけである。同じことは長崎の住民にもあてはまるが、オランダ人のアルノルドゥス・モンタヌスは、「インドの諸民族と比較したときは、かれらは白人であり、ヨーロッパ人と比べたときは、黄色で、さえない色の肌をした人びとである」と述べている。[9] ドイツ人内科医ケンペル（ケンプファー）は、「さまざまな地域ごとに、日本人の身体的特徴には、はっきりと目につく違いがある」ことを強調したが、一般的には「か

---

(5) Nicolaus Trigautius [Trigault](ed.), *De Christiana Expeditione apud Sinas Suscepta ab Societate Iesu, Ex P. Matthaei Riccÿ Commentarÿs libri V, Ad S.D.N. Paulum V. [...]* (Augustae Vind. 1615) 86. Cf. e.g. Gabriel Naudé, *Considérations politiques sur les coups d'Etats* (s. 1., 2nd edition, 1667) 84-86. そのほかの例は、Reichert, *op. cit.*, 7 をみよ。かれはマルコ・ポーロやオドリゴ・ダ・ボルデノーネまでさかのぼって「ゆりのような足［纏足］」の報告をたどるだけでなく、とくに 18 世紀、19 世紀においては、この習俗が「一時的な流行」であるとヨーロッパ人に見なされていたことを指摘している。

(6) Kapitza, *Japan* I, 64-65. 原文は、'sehr wohlgeformt und von sehr heller Hautfarbe [...] sehr gefällig und sanftmütig'。ベルナルディーノ・デ・アヴィラはまた、日本人女性たちの性格、敬虔さ、信頼がおける点、飲酒が少ないことを賞賛している。

(7) Donald Frederick Lach or idem and Endwin van Kley, *Asia in the Making of Europe* I-III (Chicago and London, 1965-1993), I/1, 258-62. ヴァリニャーノはインド文化には魅了されなかった (ibid., 280)。

(8) たとえば、これは次の文献からあきらかとなる。Newe / wahrhaffte / außführliche Beschreibung / der jüngstabgesanden Japonischen Legation gantzen Raiß [...], Dillingen, 1587 (Kapitza, *Japan* I, 163. 以下、'Raiß' と略記する). ここでは、「日本には白い人びとが住んでいると／主張され／日本は寒い国だから／そう信じ込むかもしれないが／この日本人の男たちは（おそらくあまりに長期間にわたる長距離の旅のせいで色あせて）大半がオリーヴ油のような茶色である／……gleichwohl man auch sagt / daß in Japon weisse Leuth sein / welches wol zu glauben / disweil es ein kalt Land / Jedoch sein dise Japonischen Herren (villeicht wegen der so langen vnnd weiten Raiß etwas entferbt) mehrers thails Oelbraun / [...]」と記されている。

(9) Arnoldus Montanus, *Denckwürdige Gesandshafftten der Ost-Indischen Gesellschaft in den Vereinigten Niederländern / an unterschiedliche Keyser von Japan* (Amsterdam, 1670) 52. 原文は、'[...] seind weis / gegen die andern Indischen Völckern zu rechnen, aber sonst / gegen die Europer / galblicht / und ohne lebendige Farbe'。

なり茶色の肌をした人びと」だと結論づけた[10]。しかし、かならずしもこれはかれらの肌についての代表的な記述というわけではない。たとえば、ディオゴ・デ・コウトは日本人を中国人よりも「白い」人びととさえ記している[11]。1735 年になっても、広東の住民が「茶色」の肌をしていたという叙述にたいして、18 世紀に広く読まれた中国にかんする文献を著したイエズス会士デュ・アルドは、読者に誤った判断をしないように次のように警告している。「南部の海岸部に住む中国人だけを見た人びとがいう色と、実際の中国人の顔の色とは異なっている。貿易商や田舎に住む人びとは、その地方に特有のきつい日差しのために、日焼けしてオリーヴ色の肌になるのだ。しかしながら、他の地方の人びとは、生まれつきヨーロッパと同じくらい白い肌をしている[12]」。

中国に訪れて、みずからの経験について執筆したヨーロッパ人たちの多くは、18 世紀の終

---

(10) Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens (OAG) Tokyo (ed.), *Engelbert Kaempfers Geschichte und Beschreibung von Japan* I-II and commentary vol. (Berlin et al., 1980) [以下、Kaempfer, *Geschichte* と略記する] I, 110 [今井正編訳『日本誌――日本の歴史と紀行』全 2 巻、霞ヶ関出版、1989 年]. ケンペルについては、とくにデトレフ・ハーバーラントの研究を参照せよ。e.g. Detlef Haberland, 'Zwischen Wunderkammer und Forschungsbericht – Engelbert Kaempfers Beitrag zum europäischen Japanbild' in: Doris Croissant and Lothar Ledderose (eds.), *Japan und Europa 1543-1929* (exhibition catalogue, Berlin, 1993) 89-93. しかし、かれが 83 頁でケンペルの作品が「当初ヨーロッパには何の影響もなかった」と考えているのは間違いである。後出の註 (17) の文献を参照。

(11) Diogo de Couto, *Da Asia de* - -, I-XIV (Lisboa 1778-1788), particularly II/2 (Dec. V, liv. VIII, cap. XII), 266. 日本人は「中国人よりも色白の人間 homems mais alvos, que os Chins」と言われている。日本人についての概観は、Cooper, *Japan* の以下の叙述を参照せよ。「日本人は色白だが、北方の諸民族のようにひどく白色ではなく、まさに適度に白い肌の色をしている」(37, João Rodrigues Giram, 1604);「女性は適度に美しく、どちらかと言えば青白い顔色をしている……」(38, Francesco Carletti, about 1600, printed 1701);「女性は色白で概して美しい外見をしている」(39, Bernardino de Avila Girón, 1604)。また、Kapitza, *Japan* I の以下の叙述を参照。「茶色い姿 brauner Gestalt」(288, O. van Noort, 1601);「女性たちは色白だが、血の気がない肌をしている」(376, J. Saris, 1617); 男性は「かなり［白く］ziemblich」、女性は「本当に白い gar weiß'」(460-461, C.C. Fernberger, 1621/28)。「肌の色はスペイン人たちと変わらない an Farbe den Spaniern nicht ungleich」(585, C. Schmalkalden, 1642/52); 日本人男性は「黄色い／が、その女たちは背が低く白い／なぜなら、かの女たちは豊かな生活をしていないからである gelb / jhre Weiber aber kurtz vnd weiß / weil sie nicht viel außkommen」（612）;「ヨーロッパ人のように白い weiß wie die Europäer」(633, M. Thevenot, 1663)；「黄褐色 Geel-Braun」(660, C. Hazart, German translation 1678, Dutch original edition, 1667-1671); 男性は「黄色っぽい gelblicht」が、女性たちは「多くの者が家に留まっているので／ヨーロッパ人のように／……白い／ mehrentheils in Häusern bleiben / [...] so weiß / als die Europeer sein mügen」(678, J. Andersen, 1669)。オランダ人で最初に日本に訪れた D.G. ポンプもまた、多くの日本人の肌は白色であると記していた。Tanja G. Kootte, 'A Distant Land of Silver' in: Stefan van Raay (ed.), *Imitation and Inspiration. Japanese Influence on Dutch Art* (Amsterdam, 1989) 7-13, 8 [尾崎彰宏訳『模倣と霊感――オランダ美術にあたえた日本の影響』D'Arts(Amsterdam)、1989 年]. ニウホフもまた、日本人とヨーロッパ人のあいだの違いをほとんど見つけてはいない。Nieuhof, *Gezantschap* II, 56.

(12) Jean-Baptiste Du Halde, *Description géographique, historique, chronologique, politique, et physique de l'empire de la China et de la Tartarie chinoise* I-IV (Paris, 1735) II, 80.　原文は、'La couleur de leur visage n'est pas telle que nous le disent ceux qui n'ont vu de Chinois, que sur les côtes des Provinces Méridionales. A la vérité, les grandes chaleurs qui regnent dans ces Provinces [...] donnent aux Artisans & aux gens de la campagne, un teint besané & olivâtre; mais dans les autres Provinces, ils sont naturellement aussi blancs qu'en Europe [...]'。

わり頃までは、広東人という例外はあっても、中国人は白人であると考えていた[13]。かれらの考えが変化した理由のひとつには、18 世紀末になるとヨーロッパ人は科学的・技術的業績に大きな誇りを持ちはじめたことがあるだろう。つまり、かれらは東アジアの人びとを同等であるとはもはや見なさなくなったのである。それゆえに、しだいにヨーロッパ人は、東アジアの人びとの肌は自分たちとは異なっていなければならない――すなわち黄色の肌をしている、と信じるようになったのだ。ようするに、中国人と日本人は「黄色人種」の一員であると宣言されたのである。かつては、肌以外の東アジア人の他の特徴は長いあいだ賞賛されてきたのだが、人種主義の伸張は、2 つの民族にたいしてヨーロッパ人が抱いたイメージに、後になって大きく影を落とすことになった。

性格と習俗

性格と習俗にかんするかぎり、中国人と日本人のどちらも、当初は例外的に勤勉であると見なされていた[14]。しかし、ほんらいは疑いなく肯定的なこの特徴も、1740 年頃からは問題視されるようになった。それは次のようなものである。中国人は極端に人口の多い国に住んでいる

---

(13) Nigel Cameron, *Barbarians and Mandarins. Thirteen Centuries of Western Travelars in China* (New York and Tokyo, 1970) 150 におけるフランシスコ・ザビエルの引用を参照 ; Pedro Morejón, *Historia y relación de lo svcedido en los reinos de Iapan y China, [...] desde el año de 615 hasta el de 19* (Lisboa, 1621) 104v:「色白の人びと gente blanca」; Trigault, *De expeditione*, 65:「中国の人びとは概して色白だが、熱帯地域付近の地方には肌の色が黒い人も少しはいる Sinica gens ferè albi coloris est, nam nonnulli è prouincijs ob vicinitatem zonae torridae subfusci sunt」. おもに広東（！）で目撃した中国人についての報告は、教皇グレゴリウス 13 世あてのフランチェスコ会修道士パオロ・ダ・ジェズの書簡に記されている。「白い色である sono di color bianco」(Marcellino da Civezza, *Storia universale delle Missioni Francescane* VII/2 (Prato, 1891) 899 からの引用); Martino Martini, *De bello tartarico historia* (3rd edition, Coloniae, 1654) 19-20: 中国人同様タタール人も「色白である albo colore」; Henri de Feynes, *Voyage faict par terre depuis Paris Jusques à la Chine* (Paris, 1630) 164 では、中国人の肌のことを「とても白い fort blanc」と記している。Samuel Purchas, *Haklvytvs Posthumus or Purchas his Pilgrimes* I-IV (London, 1625) III, 410 にも「非常に白い」と同じ趣旨のことが述べられている。同様にたとえば、Johann Christoph Wagner, *Das mächtige Kayser-Reich Sina / und die Asiatische Tartarey [...]* (Augspurg, 1688) 139 にも、中国人女性のことを「概してとても美しく／愛らしく品がよい／……肌は白く目は茶色 insgemein überaus schön / lieblich und anmuthig [...] weiß von Haut und Braun von Augen」と記されている。より詳細には（次の点についても）、Walter Demel, 'Wie die Chinesen gelb wurden. Ein Beitrag zur Frühgeschichte der Rassentheorien', *Historische Zeitschrift* 255 (1992) 625-666. 内容を大きく増補したイタリア語版は、idem, *Come i cinesi divennero gialli. Alle origini delle teorie razziali* (Milano, 1997). 日本人の外見へのヨーロッパ人の見方にかんしては、いくつかの省察を加えた拙著の省略版が日本語で出版されている。ヴァルター・デーメル「中国人はどのようにして黄色人種になったか――ヨーロッパ人のアジア観の変遷」『学術国際交流参考資料集』（明治大学）247 号、2000 年。中国人同様、日本人も 1750 年以降は「白い」と描かれることは非常にまれになっていった。Kapitza, *Japan* II 所収の以下の史料を参照せよ。「鉛色である bleyfärbig」(433, Allegemeine Historien der Reisen zu Wasser und zu Lande, 1747-1774);「オリーヴ色 Olivenfarbe」(486, F.M. Abbé de Marsy, German translation, 1756);「茶色い顔色 braune Gesichtsfarbe」(507, I. Kant).

(14) González de Mendoza, *Historia*, 24. 日本人の勤勉さについては、たとえば Kapitza, *Japan* I, 296, 354, passim をみよ。

うえに、かれらの政府は食糧を輸入することも、他国に出ることのいずれも許さなかったので、中国人はひどく必死になって働かなければならなかった――それゆえに、高尚な精神を育成するような時間を持てないのだと。(15)

しかし、東アジア人は不満なく仕事を受け入れていただけでなく、そのほかの困難にも耐えていた。イエズス会のマッフェイが日本人について述べなければならなかったことに耳を傾けてみよう。「かれらは賞賛に値する忍耐強さで、餓え、乾き、暑さ、寒さ、不眠、肉体的活動という、人生のありとあらゆる不快な側面にたえていた。真冬でさえ、新乳児をすぐに川に入れて、水につからせたのだ」。(16) 日本人は、倹約（少なくとも食事については）であり、それゆえに健康で長寿であり、一般的にとても自己を律する人びととして、また誇り高く、慎重で、礼儀正しく、名誉にとても敏感なので怒りやすい人びととして描かれた。さらに、遊興を嫌い、清廉で親切、客好きで、真の友人であり、学問には熱心で、極端に清潔ではあるが、裸に近い状態になることを恥ずかしがらない人びととして記録されたのである――こうした日本人の特徴は後の時代においても観察されたし、今日においてもいくらかはあてはまる。(17) そういうわけで、たとえば 1585 年の天正遣欧使節の日本人少年たちは、「生意気で慎みのない他の少年たちとはまったく異なっている」と記されている。「一般の人びとや労働者、職人」さえも「出し

---

(15) Cf. e.g. Guillaume-Thomas[-François] Raynal, *Histoire philosophique et politique des établissements et du commerce des Européens dans les deux Indes* I-X (Genève, 3rd edition, 1781) I, 124, 151.

(16) Jo[hannes] Petrus [Giovanni Pietro] Maffei<us>, *Historiarvm Indicarvm libri XVI, selectarvm item ex India Epistolarum eodem interprete Libri IIII* (Venetiis 1589) 206. 原文は、'Mortalitatis incommda, famem, sitim, estum, algorem, uigilias, laboresque admirabili patientia tolerant. In lucem editi, uel hyeme summa, protinus lauandi as flumina deferuntur'。

(17) これらの個人的な性格については、たとえば Kapitza, *Japan* I, 63-64 のなかで、J. アルバーレスによって論じられている。また日本人の性格はイエズス会宣教師コスメ・デ・トレスに古代ローマ人を想起させている。つまり、とても怒りやすく、誇り高く、好戦的で短気、果断にして勇敢、名誉のためであればすぐさま武器をふるい、年長者を敬い、みずからの発言を守るためにはあらゆる努力をし、姦通のような不名誉を忌み嫌うといった具合である。しかしながら、トレスによれば日本人は法律をあまり重視せず、たいていは暴力をもって争いに決着をつけた。むろんこのことは、トレスが正しく観察しているように、権力が地方の支配者［大名］の手にあった時代のことである。Lach, *Asia* I/2, 677-678. またたとえば、1640 年までの史料は Cooper, *Japan*, 42-45 に収録されている。18 世紀については、Karl Peter Thunberg's [...] journeys to Africa and Asia, in particular to Japan during the years of 1772 to 1779 をみよ。ドイツ語訳は 1792 年に出版されており、ここでは Kapitza, *Japan* II, 741-742 にしたがった。ドイツにおける日本人のイメージについても、上記のことが完全に一致している。Josef Kreiner, 'Deutschland-Japan. Die frühen Jahrhunderte' in: idem (ed.), *Deutchland-Japan, Historische Kontakte*, Studium universale III (Bonn, 1984) 1-53. ここではとくに 20 頁を参照 ; Peter Kapitza, 'Japan in der deutschen Literatur des 17. und 18. Jahrhunderts' in : Josef Kreiner (ed.), *Japan-Sammlungen in Mussen Mittleuropas*, Bonner Zeitschrift für Japanologie 3, 49-57; idem, 'Engelbert Kaempfer und die europäische Aufklärung. Zur Wirkungsgeschichte seines Japanwerks im 18. Jahrhundert' in: Kaempfer, *Geschichte*, commentary vol., 41-63. 19 世紀における、日本についての最高の権威とされるフィリップ・フランツ・フォン・ジーボルトもまた、同様の印象を抱いていた。かれによる説明は、Herbert Scurla (ed.), *Reisen in Nippon. Berichte deutscher Forscher des 17. u. 19. Jahrhunderts aus Japan. Engelbert Kaempfer– Georg Heinrich von Langsdorff – Philipp Franz von Siebold* (Berlin/GDR, 1969) を参照せよ。本論では 370, 388, 420, 437, 442, 465, 503, 508, 516, 537, 543 の各頁の記述にしたがった。

ゃばらず正直で」あり、「その作法はとても礼儀正しいものであったので、人はかれらが長い間宮廷に出仕していたと想像するだろう」とも記録されている。これは幼い子供たちにさえあてはまり、かれらは悪口で相手をののしるどころか、お互いに優しく親切にふるまうと言われていた[18]。出島の商館長フランソワ・カロンにすれば、これは教育の成果であると思われた。日本人はかれらの子供たちを「とても愛しており」、たとえ一晩中泣き続けていたとしても、きたない言葉や、ましてや平手打ちを与えることはなかったとかれは記している。「常識は年齢とともに備わってくるが、良き作法は時間がたてば自然に身につくものである。それゆえに、優しく話しかけ、親しく教えて、子供たちを育てるべきだとかれらは述べている[19]」。エンゲルベルト・ケンペルは、日本全体が「すべての礼儀と良き作法の学校」と呼ぶことができるとさえ記していた[20]。

また中国では、ヨーロッパ以上に行き渡っている人びとの礼儀正しさを旅行者たちは目の当たりにしたが、こうした現象は、中央の支配層が人びとを統制するために広めた手段としかモンテスキューが理解できなかったものである[21]。中国では、礼節や儀礼、それに招待状にも少なからず重きがおかれていた。中国人と付き合いはじめた当初から、本題に直接入ることができなかったと宣教師たちは記している[22]。しかし、とくに清朝の官人に数多くの祝辞をきわめて正確に述べなければならない場合には、宣教師たちは本当に苛立つこともあった。誰が最初に席につくのかもはっきりとさせようとはしなかったために、宴会の席につくだけのことも、多くの時間を消費することであった[23]。というのは、自分のことを最初に着席するほど立派な人間だ

---

(18) ‘Raiß’ (Kapitza, *Japan* I, 155-156). 引用は 155 頁より : ‘weit von aller Jungen Leuth / frech vnd freyheit’; ‘der gemeine Mann / Handwercks Leuth / vnd Taglöhner / sein ... / bescheiden und erbar’; ‘so guoter Höflicher Sitten / als weren sie lange zeit / an vnd bey einem hof auferzogen’; ‘holdselig vnd freundlich’。

(19) Fr[ançois] Carons und Jod. Schoutens, *Wahrhaftige Beschreibungen zweier mächtiger Königreiche / Jappon und Siam [...] Denen noch beigefüget Johann Jacob Merckleins Ost-Indische Reise*, German edition (Nürnberg, 1663) [以下では Caron, *Beschreibungen* と略記する], 114-115 [幸田成友編訳『日本大王国』平凡社東洋文庫、1967 年]. 原文は、‘sagen / der Verstand komme mit den Jahren; und gute Maniern nämlich werden schon mit der Zeit von sich selbst folgen: Also daß die Kinder nicht anderst / als mit guten Worten / und freundlicher Unterweisung aufgebracht werden’。とはいえ、ヨーロッパ人は東アジアにおいて堕胎や子売り、子捨て、口減らしが広がっていることを頻繁に批判していた。たとえば、John Barrow, *Travels in China* (London, 1804) 167-169 や Christoph Meiners, ‘Ueber die Natur der Volker [...]’, *Göttingisches historisches Magazin von C. Meiners and L.T. Spittler* VII/2 (Hamburg, 1790) を参照せよ。ここでは、Kapitza, *Japan* II, 788 から引用した。堕胎・子売りなど、この非常に複雑な問題は、キリスト教思想においては、過去現在を問わずきわめて重要な意味を持っている。

(20) Kaempfer, *Geschichte* II, 194. 原文は、‘hohe Schule aller Höflichkeit und guten Sitten’。

(21) Charles-Louis de Secondat Montesquieu, *De l’esprit des lois* I-II, ed. Garnier-Flammarion (Paris, 1979), here XIX, 16 [野田良之他訳『法の精神』全 3 巻、岩波書店、1987-1988 年].

(22) たとえば、1584 年 1 月 25 日付けマカオ発の書簡のなかで、中国への最初の宣教師、ルッジェーロは次のように述べている「これらの中国人には不躾な熱意ではなく、きわだった巧妙さと優美さが必要である Con questi Cinesi bisogna procedere cõ gran destrezza et soauità, et non con feruori indiscreti」。*Nvovi Avvisi del Giapone, con alevni altri della Cina del LXXXIII, et LXXXIV. Cauati dalle lettere della Campagnia di GIESV* (Venetia, 1586) 171.

(23) Trigault, *De expeditione*, 70-74.

と考えている印象を与えることは、誰一人として望んではいなかったからである。多くの点でそれは作り話か、さもなくばほとんど笑い話のようにヨーロッパ人には思われた。たとえば、官人が新しい官職に任命されたときには、就任を辞退する手紙を最初に書かなければならなかった。ところが本人は、この辞退の手紙が予期せず受諾されてしまわないことを、心から願っていたのである。[24]

定期的に贈る必要のあった数多くの贈り物は、高価なものもあったために、ヨーロッパ人には負担となった。たとえば、当時のヨーロッパ人とはまったく異なって、中国人たちは自分たちが生まれた年や月日、時間を正確に覚えており、毎年友人や部下から贈り物を受け取ることを望んでいたのである。[25]そのお返しとして、おそらく贈り物を受け取った人はその社会的地位にみあった宴会を専門の飲食店で開いた。そうした宴会では音楽や芸能の催しがあり、景気よく行われた。極端な例では、10 日間ものあいだ続き、膨大な金額を消費することになったのである。[26]ときには 100 皿以上の食事が供されることもあった。[27]ニウホフは躊躇なく次の言葉で詩をしめくくっている。「このようなことが異教徒たちのあいだで存在するとは。われわれは楽園にいるのだ」。[28]しかし、宣教師たちが中国人の宴会――たしかに小規模ではあるが――について述べたこととは、料理を供する皿があまりに小さいので、招待客は 4 時間から 6 時間ものあいだ席について食事をしていても、空腹が依然として満たされなかったために、宴会が食事向けとは思われなかったということだ。[29]ただ、そうした機会では大量の酒が飲まれたという事実だけに、誰もが同意していた。[30]

東アジアの平民は上流階級とは異なって、質素な生活を送る傾向があり、おもに米や麦、野菜に香草を食べていたことも、同様に疑問の余地がなかった。[31]しかし、指で料理にはふれないという注意深い作法が、清潔さを保つ模範的な行いだとして、ただ一人を除いて著作家たちす

---

(24) Diego Pantoja, *Carta del Padre [...] para el Padre Luys de Guzmã Prouinicial en la Prouincia del Toledo. Su fecha de Pequin [...] a nueue de Março de mil y seyscientos y dos años* (Seville, 1605) 115v; cf. Nieuhof, *Gezantschap* II, 37; Virgile Pinot, *La Chine et la formation de l'esprit philosophique en France* (1640-1749) (Paris, 1932) 407; Basil Guy, *The French Image of China before and after Voltaire*, Theodore Besterman (ed.), Studies on Voltaire and the Eighteenth Century XXI (Geneva, 1963) 230.

(25) Domingo Fernández Navarrete, *Tratados Historicos, politicos, Ethicos y Religiosos de la Monarchia de China* (Madrid, 1676) 71.

(26) Fernão Mendes Pinto, *Peregrinação e outras obras,* ed. by António Saraiva, I-IV (Lisboa, 1961-1984) II, 207-208 [岡村多希子訳『東洋遍歴記』全 3 巻、平凡社東洋文庫、1979-1980 年]; cf. Gaspar da Cruz in: Charles Ralph Boxer, *South China in the Sixteenth Century. Being the Narratives or Galeote Pereira, Fr. Gaspar da Cruz, O.P., Fr. Martín de Rada, O.E.S.A* (London, 1953) 142.

(27) González de Mendoza, *Historia*. 119-120.

(28) Nieuhof, *Gezantschap* I, 47. 原文は、'Is dit in't Heidendom? Wy zÿn in't Paradÿs'。

(29) Pantoja, *Carta*, 112.

(30) Trigault, *De expeditione*, 70, 74; Nieuhof, *Gezantschap* II, 41.

(31) Pantoja, *Carta*, 72v. J. アルバーレスについては、Kapitza, *Japan* I, 63 にしたがった。

べてが誉めたたえている[32]。肉料理やぶどうを発酵させて生産したワインにときには不自由したヨーロッパ人は、東アジアの料理のなかにも美味なものがあると思ったが、少しもそう思わない場合もあった。たとえば、オランダ東インド会社で働いていたフランケン人外科医メルクラインは、日本酒を「南京虫」のような味がすると述べていた[33]。しかしながら、「満腹のときは」日本人はみな「酒の酔いが醒めるまでに」睡眠についていたために、アルコールを摂取したあとに喧嘩を起こすことが決してないことを、少なくともカロンは賞賛している[34]。

中国と日本、どちらの国でも屋内だけでなく屋外においても、「極端な清潔さ」は記録された[35]。さらに、東アジア人はヨーロッパ人よりもずっと頻繁に身体を洗って清潔にしているのは明白であり、この事実は、幾度も幾度も驚きを持って観察された[36]。そのうえ著作家たちは、かれらの国よりもずっと衛生状態が良好に保たれていることを知ったと思われるが、その理由のひとつには、中国人が――日本人もまたそうだが――商才に長けた人びとであったので、肥料として人間の排出物を売ることさえしていたこと[37]、もうひとつの理由は、ヨーロッパではほとんど知られていないように思われた衛生を保つための道具を、東アジア人があきらかに利用していたことがある。アルバーレス・セメドは、数多くの船舶が紙だけを輸送していることをとても驚いて詳述しており、この紙がどう使われたかについて慎重にほのめかしている。「どの家でも共通して言えることだが、それは（これについて話すのを許していただきたい。なぜなら、ものをどう使うのかはすべて神の配慮と摂理のあらわれなのだから）便所を清潔に保つのに役立っている。それは街頭でも商店でも売られているが、それに字が書かれることは決してない。なぜなら、字が書かれたものを便所で用いるというのは、冒涜になるからだ[38]」。したが

---

(32) Cf. e.g. Trigault, *De expeditione*, 71. アウグスティノ会士マーティン・デ・ラーダだけが、極東人の巧みな箸使いを「どこか下卑たもの」と見なしていた。Boxer, *South China*, 287.

(33) Johann Jacob [Jacob] Merklein, *Journal [...]* (Nürnberg, 1663). ここでは Kapitza, *Japan* I, 637 から引用した。

(34) Caron, *Beschreibungen*, 111. 原文は、‘wann der Wanst voll ist’, ‘bis er vom Wein entladen ist’。

(35) 中国については、González de Mendoza, *Historia*, 36 に「きわめて清潔である grandísima limpieza」と記されている。（17世紀初頭の）日本については、たとえば Rodrigo de Vivero, *Relacion* をみよ。ここでは Kapitza, *Japan* I, 354 にしたがった。

(36) E.g. Nieuhof, *Gezantschap* II, 59.

(37) たとえば、Nieuhof, *Gezantschap* I, 88 では、南京の街では豚が非常によく見かけられており、「街路はほとんど使えない dat men de straten nauliks gebruiken kann」と記している。それでもやはり、動物の排出物が収集され農村地帯に売られるために、街路はそれほど汚れてはいない。同じことは――肥料不足によるとはいえ――日本でもあてはまり、疫病が起こりにくいことはそれで説明がついただろう。Susan B. Hanley, ‘Tokugawa Society: Material Culture, Standard of Living, and Life-Styles’ in: John Whitney Hall (ed.), *The Cambridge History of Japan* IV: *Early Modern Japan* (Cambedge et al., 1991) 660-705, 697-698. 679 頁では、近世では、日本の衛生環境はヨーロッパよりもたしかに高かったが、いずれの場合も現在の基準には達してはいないと述べている。

(38) Semedo, *Imperio*, 36. 原文は、‘[...] (permitasenos el dezirlo, porque todo son imagenes de atencion, i providencia en al uso de las cosas) para limpieza en las latrinas generales en toda vivienda. Este se vende por las calles, ademas de averle en las tiendas; i en ninguna manera ha de ser escrito, porque a tener qualquiera letra, es entre ellos sacrilegio el usar dèl en esta parte’。また Kaempfer, *Geschichte* II, 173-174 は、日本では便所だけでなく浴場もまたきわめて衛生的であると記している。

って、一般に言われるように紙だけが中国人の発明品というだけではなく、トイレット・ペーパーもまたそうであるというのは、文明について高慢になったヨーロッパではおそらく忘れられた事実である。同じことはハンカチにもあてはまる。「ある種の柔らかくてしっかりとした紙で、かれらは鼻をかみ、使った後で……紙は不潔なものとして捨てられる」と、あるイングランド人は同じ頃に見かけて驚いている。[39]

ヨーロッパ人が嫌悪を抱いたのは、東アジア人が、とくに僧侶たちが猥褻な性的嗜好をかれらの見解では持っていたことである。男色［衆道］[40]と売春は、日本ではとくに広がっていると言われていた。貧しい両親によって娘が売春のためにじっさいに売りに出されていたという事実は、ヨーロッパの観察者たちは気がつかないわけではなかった。しかし、そうした少女と結婚するのが決して不名誉とは見なされなかったのは、かれらには奇妙に思われた。[41] ジョルジュ・アルバーレスは、日本の法律では男性は妻を一人しか持つことを許されていなかったが、富裕な日本人は数の違いこそあれ妻妾を持っていたことにすでに気づいていた。他方で、日本人の善良な妻は、特別の許しがなくとも家から外出し、好きなところに行くことが許されていた――そうした事実に、アルバーレスははっきりと驚いていた。[42] しかしながら 17 世紀に入ると、大名の奥方たちは、親戚を訪ねるために年に一度駕籠に乗って外出するのが許されたにすぎないと報告されている。[43] この習慣は、当時の日本の状況が、少なくとも上流階級に限って言えば、中国の状況と類似していたことを示している。だが中国においては、おそらくその全土というわけでも、また地方では必ずというわけでもなかったが、気品のある女性を通りで見かけることはなかった。もし、かの女たちが外出しなければならない場合では、普通の女性であっても駕籠に乗って出かけた。それで、家の主人は自分の妻が誰の家に行ったかについて知ることができた。それ以外のときには、女性はひとりで生活しており、その夫だけがかの女の部屋に入ることが許されていた。[44] 中国の政治・社会秩序におけるこの家父長的特徴は、近世の多くのヨ

---

(39) *The Travels of Peter Mundey in Europe and Asia, 1608-1668 [...]*. Kapitza, *Japan* I, 512 から引用した。

(40) Cf. e.g. Cooper, *Japan*, 46-47; Kaempfer, *Geschichte* II, 257.

(41) 中国についてはたとえば、Gaspar de Cruz (in: Boxer, *South China*, 149-150); Nieuhof, *Gezantschap* I, 115; Fernández Navarrete, *Tratados*, 16 をみよ。日本については、Kaempfer, *Geschichte* II, 187 があるが、この 10 頁で日本人男性は「情欲にとても耽溺している der Wollust sehr ergeben」と記されている。

(42) J. Alvarez: Kapitza, *Japan* I, 64-65; Cf. Cooper, *Japan*, 64-65; Lach, *Asia* I/2, 658-659, 687. Pierre F. Souyri, 'Luís Fróis et l'histoire des femmes japonaises' in: Robert Carneiro and Arturo Teodoro de Matos (eds.), *O século cristão do Japão* (Lisboa, 1994) 629-644 は、のちの時代とは対照的に、13 世紀から 16 世紀にかけての女性が持っていた相対的な自由について記している。現実にはおそらく、夫の側から形式的な手順がはじめる必要があったにせよ、女性みずからが離婚を決定する可能性までもが、この自由にはふくまれていた。

(43) Caron, *Beschreibungen*, 113; Bernhardus Varenius, *Descriptio regni Japoniae* (Amsterdam, 1649), Kapitza, *Japan* I, 574-575 からの引用。ここでファレンは、日本人男性が気晴らしのためや、子供を産ませるための性的対象としか女性を見なさなかったことを指摘している。

(44) E.g. Martín de Rada (in: Boxer, *South China*, 182-183); González de Mendoza, *Historia*, 39; Semedo, *Imperio*, 48. 18 世紀においても、日本人女性は中国人女性よりも概して個人的な自由を持っており、少なくともこれは Carl Peter Thunberg, *Resa uti Europa, Africa, Asia, förrättad aren 1770-1779*, I-IV (Upsala, 1788-1793) のなかで主張されている。ここでは Kapitza, *Japan* II, 724 にしたがった。

ーロッパ人にはまさに模範となるように思われたのだった。

日本人とは対照的に、中国人は、正直であるとか、名誉を重んじるというようにはあまり考えられていなかった[45]。とくにイギリス人商人は、宣教師たちと同様に、中国人商人のことをずる賢く高利貸しのようでさえあると記している[46]。オランダ人のリンスホーテンはかれらのことを「頭が切れる」としか見なさなかった一方で、かれの同国人のニウホフは、少なくとも地方ごとの住民を区別して考えるようにつとめていた[47]。またイエズス会士セメドは、たとえば、中国人肉屋の抜け目のないやり方に憤慨し、次のように述べている。「かれらは、ヤマウズラの胸肉をとり、その空洞を何か他のもので満たして、巧みなやり方で閉じてしまうので、もし買い手の目が鷹の目でもなければ、……羽根と骨以外見つけられない」。年老いた馬にたっぷりと水を飲ませて、若い馬として売るというのはヨーロッパでも行われているが、「さらにそれ以上に、食欲をそそるような斑点や……自然の色で色づけして、夕闇のなかで売り出すということまでする」とセメドは続けている。――これは、かれにすればひどく悪意のあることに思われたのであった[48]。

中国について書かれた古い記述にしたがえば、中国の悪徳商人はだいたい複数の天秤と 2 種類の重りを使うのが常であって[49]、モンテスキューは、「世界でもっともずるい人びと」とかれが呼んだ商人たちのあいだでは、3 種類も天秤が使われているとさえ考えた。ひとつは、商人みずからが使うものであり、もうひとつは一般の消費者のもの、最後の 3 つ目は、とくに用心深い客にたいして用いるものであった。しかしながら、モンテスキューは、とくに中国で頻繁に見られた貧困について、ヨーロッパ人の道徳的常識をそのまま中国人の「不可解なまでの利益欲」にあてはめることに警戒をうながしている[50]。だが、モンテスキューのやや慎重な理解は、まったく他に類を見ないものであった。大司教フェネロンでさえ、中国人は世界でもっとも悪意に満ち、迷信深く、自己中心的で、不公平かつ不正直な人間だと知っており[51]、哲学者ルソーも最後にはこう述べている。「……身につけられない悪徳や知られていない犯罪など、中国に

---

(45) Trigault, *De expeditione*, 99:「真実をあまり愛さない veritatis parum amans」.

(46) Cf. Pinot, *Chine*, 83.

(47) Jan Huygen van Linschoten, *Itinerario. Voyage ofte schipvaert [...] naer oost ofte Portugaels Indien 1579-1592*, 2nd edition, ed. by H. Terpstra, I-III, Werken uitgegeven door de Linschoten-Vereeniging, vols. 57, 58, 60 ('s-Gravenhage, 1955-1957) I, 105 [岩生成一他訳『東方案内記』（大航海時代叢書第 1 期第 8 巻）岩波書店、1968 年]; Nieuhof, Gezantschap I, 71, 109, 126. この点と次の点については、Walter Demel, *Als Fremde in China. Das Reich der Mitte im Spiegel frühneuzeitlicher europäischer Reiseberichte* (München, 1992) 152-160。

(48) Semedo, *Imperio*, 37-38. 原文は、'Sachar las pechugas a una perdiz, i ocupar los huecos dellas con otra cosam i cerzir la rotura por donde ellas salieron, se haze cõ tal maestria, que si el comprador no es algun Argos [...] se ve con solas plumas i huessos'; 'lo que es más, pintarle de manchas apetitosas [...] i de colores naturales, eligiendo para la venta lo màs dudoso del crepusculo del dia'。

(49) Gaspar da Cruz, Boxer, *South China*, 129 からの引用。

(50) Montesquieu, *Esprit* XIX, 20. 原文は、'le peuple le plus fourbe de la terre'; 'avidité inconcevable'。

(51) Pinot, *Chine*, 392 にしたがった。

は存在しない[52]」。

具体的な文脈でいうと、ルソーの見解とは、賢明な法と真の寛容に裏打ちされた、自然神教の哲学者が統治する平和で幸福な国家という中国のイメージにたいして向けられたものであり、 このイメージは、とくにヴォルテールが支持していたものである。しかしながら、ルソーは完全に異なった視点から眺めていた。かれにすれば、中国人が野蛮なタタール人に征服されたという事実は、知恵や学芸が中国人の習慣を洗練することも、人びとの愛国心や勇気を鼓舞することにもつながらなかったという決定的な証拠となった。この点について、日本人はあきらかに問題視されなかった。それは、少数の著作家たちが、日本人の性格の「メランコリック」な側面――自然や孤独への愛やヨーロッパ人の目には価値がないと思われた古い物への関心、貴重な宝飾品への軽蔑――に注目していたためであった[53]。

軍事的な美徳と能力――勇気と戦争への適応性

しかし、初期に日本を訪れたポルトガル人やスペイン人がかねてから感心していたのは、日本人の戦士としての気質であった。日本についての報告書のなかでアルバーレスは、年端のいかない日本人が帯刀する習慣をわずか 8 歳にして身につけねばならなかったことを記している[54]。非常に頻繁に、日本人は卓越した弓の使い手として描かれるだけでなく[55]、とくに死を恐れないその剛胆さは、一方でヨーロッパ人の賞賛をあび、他方で、日本人が真の慈悲の精神に欠けていると見なされたのである[56]。

日本人とは反対に、中国人兵士はいわゆる勇気のある人間とは考えられなかった。「……中国人は戦争にふけるような人びとではない」とフェルナン・メンデス・ピントは記している。「なぜなら、かれらはほとんど戦争を経験がしたことがないという事実を別にしても、あまり勇敢ではなかったし、重装備を備えることもなく、砲兵にいたっては極端に貧弱であったからだ[57]」。『タタール人の戦争』という著作のなかで、ホアン・デ・パラフォクス・イ・メンドーサは中国を侵略した満州民族の勝利を次のように説明している。中国人の持って生まれた気質、肉体的強靭さ、

---

(52) Jean-Jacques Rousseau, ‘Discours’, 1st part in: idem, *Œuvres complètes* (ed. Gallimard) I-V (Paris, 1990-1995) . ここでは（次の点についても）III, 11 にしたがった。

(53) Cooper, *Japan*, 47-48, 260-263.

(54) Kapitza, *Japan* I, 63.

(55) J. Alvarez (1547) and F. Xaver (1552). Kapitza, *Japan* I, 63,80 にしたがった。

(56) より感嘆して示しているのは、たとえば、Jürgen Andersen, *Orientalische Reise-Beschreibungen* (Schleswig, 1669) (Kapitza, *Japan* I, 678); Caron, *Beschreibungen*, 92。想像上の楽園にたいする迷信的な希望の結果とするのは、A. Montanus (Kapitza, *Japan*, I, 695)。たとえ子供であっても死に直面した場合の覚悟を持っていたことは、Erasmus Francisci, *Neu-polirter Geschicht-, Kunst-, und Sitten-Spiegel ausländischer Völcker [...]* (Nürnberg 1670) (ibid. I, 772-773)。

(57) Mendes Pinto, *Peregrinção* II, 152. 原文は、‘[...] os Chins não são muito homens de guerra, porque além de serem pouco práticos nela, são fracos de ânimo e algum tanto carecidos de armas, a de todo faltos de artilharia’。

努力とねばり強さを考慮すると、じっさいはかれらは生まれながらの戦士であるが、自民族のなかで分裂しており、少なくとも国境に近い周縁部以外では、長い平和の時代に慣れ、人生の喜びにふけっていたために、完全に軟弱な人びとになっていたからだと主張したのである。[58]

とくに 16 世紀のヨーロッパ人に、むしろ強い印象を与えたのは、兵士たちを別にすれば中国人がいかなる武器も携帯することがなく、文学の教養とくらべて軍事的美徳がまったく重視されず、そのために対外膨張の計画に乗り出すことが疑いなくなかったという点である。この態度を賢明な平和主義か、あるいは臆病かのいずれかであると考えるかが、わずかに論争された問題であった。[59] 1580 年代には、膨大な人口があるにもかかわらず、軍事的に弱体だと思われた中華帝国を比較的小規模な軍隊で征服しようとする［ヨーロッパ人による］計画さえあった。[60] それが実現しなかったのは、とくにメンドーサのようなスペイン人聖職者が、中国人のことをいわゆる勇敢な人間ではまったくないが、訓練はされ、いずれにせよみずからの国を守るための準備をした人びとであり、基本的には軍事的海外遠征に乗り出すだけの力があるが、ただそれをする意志がないと記していたことも重要であろう。つまり、そのような暴力的な冒険にたいするヨーロッパ人の強い嫌悪感があったのである。[61]

ヨーロッパの著作家たちが、中国人が日々の生活では決して騎士道的ではないと記した事実は、中国人のこのイメージを、裏書きするものではなかった。たとえば、パントジャは読者にむかって、中国人はヨーロッパ人とは異なり、「武器を持って争いをおさめることはないが、かれらの争いはおたがいにパンチでやりあうことはある……」と述べている。顔への平手打ちは、ヨーロッパではおそらく決闘にまで発展しそうなものだが、それがかれらの心にひびくこともなかった。[62] これとは反対に、日本で同じような衝突がおこったとしたら、それはしばしば相手が死ぬまで続くこととなった。侍たちは 2 本の刀をたずさえており、かれらの名誉が損なわれたと考えたときは、ためらいなくそれを抜いたのである。また（中国では）2 人の平民のあいだでおこなわれた公共の場での衝突は、法規を乱した争乱行為だと見なされ、そのために、ただの肉体的刑罰ではなく、むしろ死刑に値する罪であると解釈された。[63]

---

(58) (次の点についても) Juan de Palafox y Mendoça [Mendoza], *Historia de la conqvista, de la China por el Tartaro* (Paris, 1670) 225-231.

(59) この問題については、Walter Demel, ‘China im 17. Jahrhundert – Kriegsgebiet oder Friedensreich?’ in: R. Asch et al. (eds.), *Frieden und Krieg in der Frühen Neuzeit* (München, Paderborn, 2001) 543-560。

(60) Lach, *Asia* I/1, 297-301.

(61) González de Mendoza, *Historia*, 81, 86-87; Pantoja, *Carta*, 43-44; Antonio Herrera [y Tordesillas], *Historia general del mundo [...]* I-II (Madrid, 1601) II, 49, 54. スペイン側もまた日本征服について考えていた。このことをヴァリニャーノは馬鹿げた行いだと断言している。しかしかれにすれば、豊臣秀吉の朝鮮出兵の失敗は、日本が（スペイン領）フィリピンへの脅威とならないことの証明となった。日本人の艦船は武装が貧弱であると言われていたのである。Josef F. Moran, *The Japanese and the Jesuits. Alessandro Valignano in Sixteenth Century Japan* (London et al., 1993) 53.

(62) Pantoja, *Carta*, 89v. 原文は、‘reñir con armas, mas su reñir es darse algunas puñadas, descabelarse, y tirarse de la melena, y en dos palabras quedan amigos’。

(63) Cf. e.g. Caron, *Beschreibungen*, 83.92.

それとは反対に、中国人官人はしばしばその家臣たちを打擲することがあった。多くの著作家が、まさにこの点で中国人は臆病で「女々しい」と考える原因になった[64]。少数の満州人が中国を征服できたのも、かれらが無気力であったからこそ可能であったと言われた[65]。現在の旅行者とは異なり、ヨーロッパ人著作家たちは、万里の長城を卓越した技術や組織上の業績ではなく、かれらの臆病なまでの柔弱さのあらわれと考えたのである[66]。

手工業と芸術の技能

とにかく、ヨーロッパ人著作家たちは「機械技術」における東アジア人の技能を、その時代におうじてじつにさまざまに判断してきた。初期のポルトガル人の年代記作者は、中国の人びとは手工業において独特の才能を備えていると述べていた[67]。またメンドーサやマッフェイは、中国人の絵画や工芸における傑出した手腕を賞賛していた[68]。しかしながら、17 世紀初期の著作家のなかには、すでにその見解が慎重になり、例外はあるにせよ、精巧さと美しさの点では、通常はヨーロッパの製品の方が中国製品よりもずっと優れていると評価する者もいた。手作業で作られた工芸品は、低価格で供給されねばならなかったために、まさに十分な美しさを持てなかったと説明されたのである。そのために、ヨーロッパ人は中国人のことを建築、絵画、さらに彫刻芸術でさえも、はっきりと劣っていると考えたのであった[69]。例を引くと絵画においても、陰影と遠近法が欠けているとして、多くの場合ヨーロッパ人は非難したのである[70]。いずれにせよ、多くの著作家たちは、東アジアの民族は模倣するのは長けていても、とくに創造的というわけではないと考えていた。

さらにヨーロッパ人たちは、日本には陶器製造者や靴屋、ビール醸造者などや、それに当

---

(64) Herrera [y Tordesillas], *Historia* II, 54; Luis de Guzman, *Historia de las missiones qve han hecho los religiosos de la compañia de Jesvs, para predicar es sancto Euangelio en la India Oriental, y en los Reynos de China y Iapon* (Alcala, 1601) I, 322 [新井トシ訳『グスマン東方傳道史』全 2 巻、天理時報社、1944-1945 年].

(65) Louis Le Comte (ed.), *Nouveaux mémoires sur l' état présent de la Chine* I-III (vol. III by Charles Le Gobien) (Paris, vols. I and II, 3rd edition 1697, vol. III 1698). ここでは I, 35 をみよ。

(66) Fernández Navarrete, *Tratados*, 30-31.

(67) Fernão Lopes de Castanheda, *História do descobrimento e conquista da India pelos Portugueses* [I-X, 1551-1561], ed. by M. Lopes de Almeida, I-II (Porto, 1979) I, 919; Damiam de Goes [Damião de Goís], *Chronica do feliçíssimo Rei Dom Emanvel IV* (Lisboa, 1567) 31v:「機械技術は、世界のすべての人びとよりも優れている em cousas de arte mecanica passam todallas nações do mundo」.

(68) González de Mendoza, *Historia*, 40; Maffei, *Libri*, 94v.

(69) Pantoja, *Carta*, 78; Trigault, *De expeditione*, 12-25, in particular 18-25.

(70) たとえば、「かれらは油彩画だけでなく、絵に陰影を描くことも知らないから、その絵画は死んで生命がないものだ Sie wissen nicht in Öl zu malen, noch malen sie Schatten auf ihren Bildern, und so sind ihre Bilder tot und ohne Leben」という中国絵画についてのリッチのコメントを参照。Josef Franz Thiel, 'Die christliche Kunst in China' in: Haus Völker und Kulturen St. Augustin (ed.), *Die Begegnung Chinas mit dem Christentum* (exhibition catalogue, St. Augustin, 1980) 27-51, 42 からの引用。

初は時計製造者やガラス製造者がいないことを知った。かれらは日本人が作った金属製品や、戦艦ではなく刀や短刀といった武器のみを賞賛しており、ある年代記作者は、「その鋼鉄の品質はヨーロッパ製の鉄を最初の一撃で砕いてしまう」と記している。[71] しかしながら、こうした場合でも中国のケースほどに、ヨーロッパ人の判断は変化しなかったというのが、わたしの印象である。[72]「シノワズリ」への当初の熱狂や、その後 18 世紀における拒絶と比較すると、日本製品への評価という振り子は中国製品の場合ほどの振れ幅はなかった。芸術におけるジャポニスムというのは、あくまで 19 世紀後半から 20 世紀初頭の現象にすぎないのである。[73] 初期のヨーロッパ人著作家たちは、日本では―― 1587 年の史料にしたがえば――年老いた名人が作ったという事実だけに価値があると見なされているので、新しい銘柄の製品すべてが一文の値打ちもないということに衝撃をうけていた。このような感性を、ヨーロッパ人は「まったく馬鹿げて価値がない」ものと考えたが、これにたいしてすでに言及したように、日本人は貴重な宝石には何の価値も見出すことはなかった。[74]

それでもやはり、日本人は新奇なものには異常なまでの関心を示した。かれらはみな、外国人には好奇心を示すと考えられており、他方で中国では、すべてではないにせよ、ごく一般の庶民だけが、日本人と同様の好奇心を示していた。[75] 中国人がヨーロッパの技術に特別の関心を持っていたとは誰も主張はしていなかったし、1792 年から 1794 年にかけて中国に訪れた大規模なイギリス人使節団が、皇帝［乾隆帝］に複雑な光学・機械仕掛けの進物を献呈しても、すぐに一種の大規模な物置部屋におさめられたことからも分かるように、18 世紀の終わり頃になってさえも、そのような主張がされることはなかった。[76] これとは反対に、日本の「鉄砲伝来史」が、日本にポルトガル人が上陸したさいの情報を伝えるもっとも信頼できる史料となったのは、純粋に偶然によるものではない。[77] 地方［種子島］の大名がこの鉄砲を獲得し、鍛冶

---

(71) B. Varenius, according to Kapitza, *Japan* I, 582-583. 引用は 583 頁より。原文は、‘von solcher Qualität des Stahls, daß europäisches Eisen davon auf den ersten Anhieb zerspringt’。

(72) Cf. Walter Demel, ‘Abundantia, Sapientia, Decadencia – Zum Wandel des Chinabildes vom 16. bis zum 18. Jahrhundert’ in: Urs Bitterli and Eberhard Schmitt (eds.), *Die Kenntnis beider ‘Indien’ im frühneuzeitlichen Europa,* Akten der Zweiten Sektion des 37. deutschen Historikertages in Bamberg 1988 (München, 1991) 129-153.

(73) Cf. Hendrik Budde, ‘Japanische Farbholzschnitte und europäische Kunst. Maler und Sammler im 19. Jahrhundert’ in: Croissant/Ledderose (eds.), *Japan*, 164-177, here: 164-165; idem, ‘Japanmode in Europa’ in: ibid., 425-426.

(74) ‘Raiß’ in: Kapitza, *Japan* I, 157-158. 引用は 157 頁より。原文は、‘gäntzlich verlacheten vnd für nicht[s] hielten’。

(75) Cf. Lach, *Asia* I/2, 658. 三好唯義は「日本人のもつ、遙かかなたの大陸へのあこがれと異国の対象への偏愛 Sehnsucht der Japaner nach fernen Kontinenten und ihre[r] Vorliebe für exotische Thematik」とさえ述べている。Tadayoshi Miyoshi, ‘Japanische und europäische Kartographie vom 16. bis zum 19. Jahrhundert’ in: Croissant/Ledderose (eds.), *Japan*, 37-45. 引用は 40 頁より。

(76) Demel, *Fremde*, 107-108. しかしながらそれらの進物は、輸送のあいだに一部が壊れていたとおもわれる。

(77) Egmont Zechlin, ‘Die Ankunft der Portugiesen in Indien, China und Japan als Problem der Universalgeschichte’, *Historische Zeitschrift* 157 (1938) 491-526, here 520-526; John Villiers, ‘The Portuguese and the Trading World of Asia in the Sixteenth Century’ in: Peter Milward (ed.), *Portuguese Voyages to Asia and Japan in the Renaissance Period* (Tokyo, 1994), 3-13. ここでは 3-4 頁をみよ。

屋に同じものを作るよう命じるまでにはそう長くはかからなかった。最初はおそらくポルトガル人の協力をあおいだであろうが、鍛冶屋は最終的に鉄砲の生産に成功して、その後ヨーロッパのモデルを元にした鉄砲は、戦国時代の日本にまたたく間に広まった。1575 年にはすでに、ある大きな戦闘［長篠の合戦］はこれらの武器を用いることで勝敗が決したのである――この戦闘は、日本の統一への最初の一歩となったばかりか、この革命的な武器技術がなければ、少なくともその統一が速やかに成し遂げられることはなかっただろう。(78)

他方で、極東は 18 世紀までに数多くの商品、とくに茶、七宝細工、陶磁器などの生産を独占していた。1709 年にヨハン・フリードリヒ・ベトヒャーがボーン・チャイナ［マイセン磁器］を発明しても、東アジアで生産された陶磁器の輸入を止めることはできなかった――簡単に言うと、東アジアの陶磁器はそれとは異なる特徴を備えていただけであった。しかし、ロココ時代に東アジアからの七宝細工や陶磁器がどれほど好まれたといっても、そうした製品は生産段階でヨーロッパ人の好みにきちんと合わせて作られていたのである。(79) さらに長いあいだ、東アジアにたいしてヨーロッパ人が遅れを取っていると認めなければならなかったものがもうひとつある。それはつまり、本の流通(80)であった。これは印刷技術の早期の発明(81)によって可能になったものである。その結果、東アジアの人びとの多くが、識字能力を備えるようになったのだ。

知的施設と教育水準

16 世紀から 17 世紀にかけては、東アジアの人びとは優れた知性と特筆すべき教育水準を持つと一般に言われていた。たとえば、ゴアのイエズス会学校では、かれらは学問分野では最良の学者であると見なされており、(82) 日本人の少年は、同年代のヨーロッパの少年とくらべても、ラテン語を早く習得するとさえ報告されていた。(83) 東アジアの国々では、女性を含めた人口のかなりの部分が――少なくとも、高い社会階層に属した人びとでは――、読み書きができた。(84) それゆえに、東アジアの「学校制度」は賞賛され、数多くの「大学」や「アカデミー」の存在が

---

(78) Maria Manuela Silva and José Marinho Âlvarez, *Ensaios luso-nipónico*s (Lisboa, 1986) 121-123.

(79) Cf. e.g. Ken Vos, ‘Les Hollandais au Japon’, *Oranda. Les Pays-Bas au Japon 1600-1868* (exhibition catalogue, Brussels, 1989)10-11. かれは、18 世紀、19 世紀の日本とは、ヨーロッパではほとんど知られていない国のひとつであり、ヨーロッパからの距離とその独特の産物の質により特徴づけられていたことを強調している。

(80) Cf. e.g. B. Varenius in: Kapitza, *Japan* I, 580.

(81) すでに *Jüngste Zeytung auß dem weitberühmten (!) Insel Jappon [...]* (Dillingen, 1586) は、「その由来を知らなかったのだから sintemalen man von jren Anfang nit weiß」(Kapitza, *Japan* I, 150) 日本人はヨーロッパ人よりも古くから印刷技術を取得していたと思われると指摘している。

(82) Lach, *Asia* I/1, 263.

(83) この主張は少なくとも ‘Raiß’ in: Kapitza, *Japan* I, 155 で行われている。

(84) 日本については、Ramusio (ed.), *Navigationi* I, 381, 383 (鹿児島発 1549 年 10 月 5 日付けのコインブラのイエズス会学校あてのフランシスコ・ザビエルの書簡); Kapitza, *Japan* I, 80 (コーチン発 1552 年 1 月 29 日付けの書簡) をみよ。中国については、たとえば Trigault, *De expeditione*, 20 をみよ。

言われたのである[85]。あるイエズス会士は、数多くの少年たちが中国では読み書きを修得していると報告している。またある者は、とくに中国南部においては、読み書きができない中国人は事実上いないと主張している[86]。1838 年になってさえ、ある著作家は中国では「驚くほど多く[87]」の人びとが書くことができると記しているが、後年、1850 年のプロイセンでは 10 歳以上の識字率が 20 パーセントであり、1861 年のイングランドにおいては、全人口の 30 パーセントがそうであったことを考えると、この報告はそう驚くにはあたらない[88]。

ヨーロッパ人は東アジアの異なる国の人びとが、会話で意志疎通をすることができなくとも、筆談では可能であるということにも驚いていた[89]。東アジア言語と、とくに漢字の類いまれな表現力（詩の技術も含んでいるが）は繰り返し賞賛されたのである[90]。しかしながら、こうした文字を学ぶさいの困難は、ルイス・フロイスの発言からもあきらかのように、両義的な見解をうみだすことになった。つまりそれは、ヨーロッパ人はその本からさまざまな芸術や科学を学んでいる一方で、日本人はその文字の深い意味を理解しようと努めるのにその人生のすべてを費やしてしまうという見解である[91]。フロイスの同輩であるパントジャは、中国ではある主題について優雅で高潔に響く言葉を書くことについて、教育が限られていることを批判している[92]。最高度の中国の学習は、ヨーロッパでただの学校の子供たちが何とかやっていること、つまり文章を書く以上のものではないと言うことで、後年の筆者たちはこの問題をとりあげている[93]。ス

---

(85) 日本については、たとえばフランシスコ・ザビエルによって伝えられている。Lach, *Asia* I/2, 665 をみよ（しかし、じっさいは修道士の学校であった）。中国については、Linschoten, *Itinerario*, 99 をみよ。

(86) François Noël, *Sinensis Imperii libri classici sex* (Pragae, 1711), preface.

(87) W[alter H.] Medhurst, *China: Its State and Prospects, With Especially Reference to the Spread of the Gospel* (London, 1838) 171:「中国では文字を知る個人の数は驚くほど多く、男性人口の半分が読むことができる」. 16 世紀において、ヨーロッパの女性はまれにしか書くことができなかったが、日本人の身分の高い女性のほとんどはそれが可能であったことを、フロイスが記している。Ana Maria Costa-Lopes, ‘Imagens do Japão. ‘Do que toca as mulheres, e de suas pessoas e costumes’ no Tratado de Luís Fróis’ in: Carneiro/Teodoro de Matos (eds.), *Século*, 591-601, on 597.

(88) Thomas Nipperdey, *Deutsche Geschichte 1800-1866, Bürgerwelt und starker Staat* (München, 1983) 463.

(89) Cf. e.g. Franz Xaver’s letter of 29 January 1552 (Kapitza, *Japan* I, 79-80), Linschoten, *Itinerario*, 119.

(90) E.g. Trigault, *De expeditione*, 27-28; ‘Raiß’ in: Kapitza, *Japan* I, 159.

(91) According to Lach, *Asia* I/2, 688.

(92) Pantoja, *Carta*, 90v.

(93) E.g. Alexandre de Rhodes, *Sommaire des divers voyages et missions apostoliques du R.P. [...]à la Chine & autres Royaumes de l’Orient* (Paris, 1653) 25. このことはすでに、中国への最初のイエズス会宣教師、ミケーレ・ルッジェーロによる 1583 年 2 月 7 日付けの書簡のなかで伝えられている。この書簡は、*Nvovi Avvisi del Giapone, Con alcvni altri della Cina del LXXXIII, et LXXXIV. Cauati dalle lettere della Compagnia di GIESV* (Venetia, 1586) に再録されている（引用は 161 頁より）。そこでかれは、中国語の文字は無限に漢字の数が多いために、「中国人は（その習得に）何年も費やす che gl’isteßi Cinesi vi spendono gli ani」と記している。たとえばヘーゲルもまた次のように述べている。「絵文字（これは中国の漢字を意味している）では、さまざまな具体的な心的観念の関係が絡みあい、混乱するにちがいない daß bei der Hieroglyphenschrift die Beziehungen konkreter geistiger Vorstellungen verwickelt und verworren werden müssen」。Du-Yul Song, *Aufklärung und Emanzipation. Die Bedeutung der asiatischen Welt bei Hegel, Marx und Max Weber* (Berlin, 1987) 22 からの引用。

ペイン出身の司教パラフォクス・イ・メンドーサは、このようなやり方こそが、タタール人との戦争で敗北する原因となったとさえ主張している。中国では軍事経験を持つ士官たちではなく、文学の教育を受けた官人たちが、あらゆる軍事的な問題について最終的な発言力を持っていると、かれは述べていた。(94)

日本の侍たちは、ほんらいは完全に戦士階級であった（のちに官僚となる傾向にあったが）ことには疑いないが、それでも、多くの僧侶たちと同様に文化にたいして大きな関心をよせることがあった。たとえば、かれらには詩を書いたり庭の手入れをする習慣があった。(95) 18 世紀において日本人たちはしばしばイングランド人と比較されたけれども（少なからずそれは、かれらが自殺をする傾向にあったためだが）、ある著作家にとっては、中国庭園のいわゆる「自然らしさ」を模倣しようとしたイングランドの庭園よりもむしろフランスの庭園のほうが、日本の庭園とは構造上は似ていると思われた。(96) しかしながら、それよりずっと以前にリッチやトリゴは、ニウホフのように、高尚で高貴な芸術のなかで、中国人は倫理学だけに知識があり、自然科学についてはほとんど何も知らないか、薬学についての知識もごくわずかであったことを強調している。(97) 当時の著名な地誌学者であるベルンハルト・ファレンは、日本人はインド人よりも科学や芸術の点では進んでおり、この側面では中国人に匹敵するが、科学のあらゆる分野においてヨーロッパ人よりも劣っていると述べていた。「法や書籍によって定められた現在の言葉の意味における法理学を日本人は持つことはなかった」とファレンは述べており、かれらが数多くの植物やその混合物の効果はよく知っているかもしれないが、外科手術の経験など持っていないうえに、中国人同様、薬学や物理学、天文学の知識はほとんど持ち合わせておらず、せいぜい数学についてある程度の知識を持つだけだと考えていたのである。(98)

自然科学の分野において東アジアの学者たちが、その可能性を十分に発揮しなかったという事実には、まったく論争の余地はなかった。少なくとも当初は尊重されたその関連分野の知識も、(99) まあまあ不完全で誤解が多いものであり、それはとくに方法論的な理解がなく、たんに経験に基づいたものであるとヨーロッパ人には思えるようになった。付言すれば、そうした学問

---

(94) Palafox y Mendoza, *Historia*, 227.

(95) いわゆる徳川幕府の幕藩体制でさえ、侍が武器と同様に書物にも熱心に取り組むべきことを規定していた。戦国時代の終焉と鎖国体制の確立は、封土を与えられた家臣から、給与を受ける官吏へと侍を変貌させたのである。George B. Sansom, *Japan. Von der Frühgeschichte bis zum Ende des Feudalsystems* (German translation, Essen, 1975) 446 [福井利吉郎訳『日本文化史』東京創元社、1951 年]; John Whitney Hall, *Das Japanische Kaiserreich*, Fischer Weltgeschichte 20 (Frankfurt/M, 1968) 195-196 [尾鍋輝彦訳『日本の歴史――伝統と革新の偉大なる歩み』講談社現代新書、1970 年].

(96) [P.-C. Le Jeune], *Observations* in: Kapitza, *Japan* II, 692, 694-695 (cf. e.g. ibid., 339, 466, 509).

(97) Trigault, *De expeditione*, 29-34 ; Nieuhof, *Gezantschap* II, 19-22.

(98) B. Varenius, Kapitza, *Japan* I, 578-579. 引用は578頁より。原文は、‘Eine durch Regeln und Bücher festumrissene Jurisprudenz im heutigen Wortsinn haben sine nicht’。

(99) たとえば、Lopes de Castanheda, *História* I, 919 や Linschoten, *Itinerario*, 104-105 は、風を利用した中国の乗り物の技術的図案を賞賛している。ところでこれは、リンスホーテンの母国であるオランダで模倣された。

にたいしては、政府からの十分な援助さえもなかったのである[100]。日本人が抱いていた、日本、中国それにシャムにより世界が構成されているという単純な世界観は、ヨーロッパ人には貧弱なものに思えた[101]。とくに、中国人の世界観にはヨーロッパ人は驚くと同時に困惑させられた。その世界観とは、中国が世界の中心としてその大部分をしめており、その周辺には、「四夷の民族」として知られる諸王国が取り囲んでおり、さらにその周りには数多くの島々があるというものである。そうした島々のひとつふたつが、中国人が近年ヨーロッパと呼び始めたものであったが、1668 年にこのことをイエズス会士マガランエスは怒って報告書にしたためていた[102]。中国人の世界地図における抽象的表記のあきらかな無理解――中世ヨーロッパの地図もそれとそう違いがあるわけではないが――とともに、中国人の生来の尊大さと、地理を無視していることにたいして、ヨーロッパ人は何度も何度も腹を立てて報告していた[103]。

さらに、中国人は 2 つの目を持っているが、ヨーロッパ人はひとつであり、それ以外の人びとは盲目であるという中国のことわざが流布していたが、それはまた、自然法・国際法学者として有名なザムエル・ブーフェンドルフと同じくらい広く読まれた著作家によって伝えられたのである[104]。こうした中国人の態度にたいして理解がえられるというのは、ほとんどの場合、中国の偉大な伝統や、あるいは活版印刷[105]もふくむ世界に先んじた発明を考慮に入れたときといった、ごく限られた機会でしかなかった。したがって、中国の本当の年代についての激しい論争は長期間続けられ[106]、進歩の概念に絶対的な信念を抱いていたイングランド人は、最終的に次のような言葉をうみだすこととなった。「古い年齢というのは、老齢に過ぎない[107]」。

---

(100) José Acosta, *Historia natvral y moral de las Indias* (Sevilla, 1590) 406 [増田義郎訳『新大陸自然文化史』全 2 巻（大航海時代叢書第 1 期第 3-4 巻）、岩波書店、1966 年], Herrera [y Tordesillas], *Historia* II, 47; Trigault, *De expeditione*, 29; Semedo, *Imperio*, 71-72, 76-78; Nieuhof, *Gezantschap* II, 19.

(101) Miyoshi, op.cit., 38.

(102) Gabriel de Magaillans [or Magalhães], *Nouvelle relation de la Chine* (Paris, 1688) 75.

(103) Diego Aduarte, *Historia de la Provincia del Sancto Rosario de la orden de predicadores en Philippinas, Iapon, y China* I-II (Manila, 1640) 118 [佐久間正・安藤弥生訳『日本の聖ドミニコ――ロザリオの聖母管区の歴史（1587-1637 年）』カトリック聖ドミニコ会ロザリオの聖母管区、1990 年]; Athanasius Kircher, *China Monumentis quà Sacris quà Profanis, Nec non variis Naturae et Artis Spectaculis Aliarumque rerum memorabilium Argumentis illustrata* (Amstelodami, 1667) 98, 169 ; de Rhodes, *Sommaire*, 20-21.

(104) Cf. already Haithonus Armenus, 'De Tartaris liber' [1307 (!)] in: Simon Grynaeus, *Novvus orbis regionvm ac insvlarvm veteribus incognitarvm* (Basilae, 1532) 419; Samuel Pufendorf, *De Iure Naturae et Gentium* [libri VIII, 1672], ed. by G. Mascovius (Frankfurt/M. and Leipzig, 1759), reprint Frankfurt/M., 1967, II 3§7 . 原　文　は、'Iamdudum a Chinensibus Europaeis vnus duntaxat oculus relictus, caeteri ceocitatis damnati'。

(105) E.g. Linschoten, *Itinerario*, 106.

(106) Walter Watson, 'Interpretations of China in the Enlightenment : Montesquieu and Voltaire' in: *Actes du colloque international de sinologie,* vol. 2: *Les rapports entre la Chine et l'Europe au temps des lumières* (Paris, 1980) 16-37. ここでは 16 頁にしたがった。中国文化の真の年代という問題は、17 世紀、18 世紀における中国をめぐる論争の主要な争点であった。Cf. David Mungello, *Curious Land: Jesuit Accommodation and the Origins of Sinology*, Studia Leibnitiana, Supplementa 25 (Stuttgart, 1985) 102-103, 124-26.

(107) ここでは、Raymond Dawson, *The Chinese Chameleon: An Analysis of European Conceptions of Chinese Civilization* (London et al., 1967), 68 から引用した [田中正美他訳『ヨーロッパの中国文明観』大修館書店、1971年]。

たとえば 18 世紀では、有名な天文学者であるフレレは科学について、中国は古代世界の状況からまったく進歩していないと信じていた[108]し、まだ中国人にたいしては比較的親しい態度をとっていたアベ・ド・マルシのような啓蒙主義の著作家さえも、中国が 4000 年もかかって科学の分野で成し遂げた以上のことを、ヨーロッパは 300 年以内で達成したと告白している[109]。そうした雰囲気の変化はさまざまな影響を持たざるをえなかった。ヴォルテールのような啓蒙期の頑固な中国思想家さえもが、中国の科学や芸術、技術的手腕にたいする初期の見解をしだいに修正せざるをえない状況を、わたしたちは見ることができる[110]。しかし、そうした初期の見解のもととなっていたイエズス会士の報告書でも、自然科学や技術の分野で独自の業績を成し遂げるうえでの根本的な才能を、中国人が持ち合わせていたとは論じてはいない。つまり、フランシスコ・ザビエルはかれらの鋭い感性を賞賛し、マガランエスもまたきわめて難解な数学的、哲学的、神学的問題を中国人たちが容易に理解できることを報告している[111]。しかし、宣教師たちは中国人が「政治と道徳の知（Scientia politico-moralis）」を十分に展開させてきたとしか強調しておらず[112]、著名な哲学者クリスティアン・ヴォルフは、中国の倫理哲学についての講演のなかで、かれらがたんに経験的手法によりこれを獲得したにすぎず、体系的にうみだされたものではないと論じていた[113]。

おわりに

もちろん、中国人はヨーロッパ人とは異なる人びとであった。しかしながら、いくつかの点では日本人のほうがいっそう異なる人びとに思われた。ヨーロッパ人の著作家はしばしば、日本人が文明化され洗練されているだけでなく、極端に奇妙で異質な人びとであるのを知って驚いていたのである。イエズス会士ルイス・フロイスは、1585 年にヨーロッパ人と日本人との違いについての記録を本にまとめて、次のように記している。「かれらの習俗の多くが、非常に奇妙で独特であり、われわれとはあまりに異なっていたので、政治（Policia）の分野における力量や、活発な精神、自然への知識をそなえた人びとが、われわれとは完全に異なっていると信じるのが、ほとんど不可能のように思われた」。当時の著名な政治思想家であるジョヴァ

---

(108) Pinot, *Chine*, 416.

(109) Guy, *Image*, 302.

(110) Jean-Robert Armogathe, ‘Voltaire et la Chine: Une mise au point’ in: *Actes du colloque international du sinologie vol,* 1: *La mission française de Pékin au XVIIe et XVIIIe siècles* (Paris, 1976), here 28, 33-35.

(111) Cameron, *Barbarians*, 150; Magaillans, *Relation*, 109.

(112) E.g. Joachim Bouvet, *Portrait historique de l’empereur de la Chine* (Paris, 1697) 146-147 [後藤末雄訳、矢沢利彦校注『康熙帝伝』平凡社東洋文庫、1970 年]; Kircher, *China*, 169, 212.

(113) Christian Wolff, ‘Rede von der Sittenlehre der Sineser’ [1721] in: idem, *Gesammelte kleine philosophische Schriften* VI (Halle, 1740), J. École et al. (eds.), *Christian Wolff. Gesammelte Werke, 1st div*., 21/6 (Hildesheim and New York, 1981) 529-662, here 236, note 140. ヴォルフにたいする一連の議論は、たとえば、Hanns-Martin Bachmann, *Die naturrechtliche Staatslehre Christian Wolffs,* Schriften zur Verfassungsgeschichte 27 (Berlin, 1977) 38-41 をみよ。

ンニ・ボテロもこうした見方を共有しており、マッフェイの著作のように、食事や生活習慣といったものが日本人とヨーロッパ人ではどれだけ異なっているのかをかれも信じることができなかった。[114] かれは日本人のことをヨーロッパ人とは「正反対の道徳」を持つ人びとであると言っており[115]——後になってしばしば用いられた表題であるが——、またたとえば、飲料水の温度や、日本のお歯黒の習慣をさして、歯の色の好みといった差異を逐次指摘していった。[116] ロレンソ・メヒアもまたイエズス会士であったが、「日本人がどれだけ他の民族とは違うのかを想像するのは不可能だ。もし、他の種類の人類が存在するとしたら、日本人こそまさにその人類だとわたしは主張したい」とさえ記している。メヒアは日本で数年、それから中国人住民が多くを占めていたマカオで 1 年以上を過ごしたのちに、上のように書いた。[117] 1736 年になっても、イエズス会の記録編纂者シャルルヴォワは、日本人の長所のほとんどは、中国人が短所とするところにあって、その逆もまたしかりであると述べていた。[118] こうした気質の違いは、エンゲルベルト・ケンペルには、「日本人はその倫理や芸術、科学を中国人に負いながらも……」、かれらがなぜ独自の民族であるのかの証しとしてさえ役立ったのである。[119]

そういうわけで、もともとヨーロッパ人と中国人、日本人とのあいだにはある種の三角関係があるように思われた。たとえば、椅子に腰掛けるという習慣は、ヨーロッパ人と中国人には共有されていた。[120] ある種の騎士道（武士道）[121] の存在は、日本人とヨーロッパ人に共通して見

---

(114) Englebert Jorissen, *Das Japanbild im 'Traktat' (1585) of Luis Frois*, Portugiesische Forschungen der Görresgesellschaft, 2nd ser., VII (Münster, 1988) III からの引用。原文は、'E são muitos de seus custumes tão remotos, peregrinos e alongados dos nossos que quasi parese incrivel poder aver tão opposita contradisão em gente de tanta policia, viveza de emgenho a saber natural como tem'。Cf. Kapitza, *Japan* I, 132-139. 最初期の報告については、Michael Cooper, 'Frühe europäische Berichte aus Japan' in: Croissant/Ledderose (eds.), *Japan*, 46-55 をみよ。オランダ＝日本間の関係の意義については、たとえば Ken Vos, 'Dejima und die Handelsbeziehungen zwischen den Niederlanden und dem vormodernen Japan' in: ibid., 72-82 を参照。

(115) E.g. in Louis Moréri, *Le grand dictionnaire historique [...]* (new edition, Paris, 1732), and in Pierre-François-Xavier de Charlevoix, *Histoire et description générale du Japon* I-II (Paris 1736), cf. Kapitza, *Japan* I, 807 and II, 338.

(116) Maffei, *Libri*, 207v ; Giovanni Botero, *Le [or Delle] relationi universali* I-IV (Venetia, 2nd edition, 1597/1598), here II/2, 97-100; Irmela Hijiya-Kirschnereit, 'Iaponia Insula – Die verspiegelte Fremde' in: Croissant/Ledderose (eds.), *Japan*, 9-35. ここでは 11 頁を参照した。

(117) Jorissen, *Japanbild*, 111-112 with note 27, quoted 112 (letter of 6 January 1584).

(118) Kapitza, *Japan* II, 126, 338.

(119) Kaempfer, *Geschichte* I, 101-111. 引用は 111 頁より。原文は、'ihre Sittenlehre, Künste und Wissenschaften von den Sinesern [...] bekommen'。

(120) これはすでにマテオ・リッチによって記されている。Trigault, *De expeditione,* 24-25. Cf. Fernand Braudel, *Sozialgeschichte des 15. bis 18. Jahrhunderts* 1: *Der Alltag* (München, 1985), 306-312. 中国人は両方の座り方を身につけており、したがって 2 種類の家具を持っていた。すなわち、たとえば日本人によって採用された古いやり方と、13 世紀頃に採用された「ヨーロッパの」やり方ということをリッチは指摘している。

(121) Inazo Nitobe, *Bushido. The Soul of Japan* (new edition Rutland/Vm. and Tokyo, 1969, 12th reprint, 1977) [新渡戸稲造著、矢内原忠雄訳『武士道』岩波文庫ワイド版、1991 年]. わたしの考えでは、100 年以上前に書かれたにもかかわらず、日本文化を理解するうえでなお重要なこの文献を、1980 年に友人である大阪市立大学の和田卓朗教授が贈ってくれたことに感謝したい。

られる特徴であるのにたいして、日本人と中国人は信教[122]や箸を使う習慣、身体的特徴を共有していた[123]。しかしながら、18 世紀における「ヨーロッパ人」としての自己認識、とくに「白人」としての自己認識が形成されていったことで、それ以前はむしろ異なる東アジアの 2 つの民族だと考えられていた日本人と中国人が、よりいっそう似通ったものとして認識されるようになったのである。

【訳者付記】

本論文はオランダの *Itinerario*, vol. 25, no. 3/4(2001) に掲載された、ヴァルター・デーメル Walter Demel 氏の論文、'The Image of the Japanese and the Chinese in Early Modern Europe: Physical Characteristics, Customs and Skills. A Comparison of Different Approaches to the Cultures of the Far East' の全訳である。

著者であるヴァルター・デーメル氏は、現在、ドイツ連邦共和国連邦国防軍大学ミュンヒェン校社会科学部歴史学研究所の教授の地位にある。本論文で考察した近世ヨーロッパにおける中国人・日本人観のほかに、近世における貴族、官僚制、行政の考察などについて数多くの研究書、論文を公表しており、その研究対象はじつに多岐にわたる。また、平成 12 年に日本に来日したさいには、本論文の内容を拡大・増補した講演、「初期近代〔＝近世〕ヨーロッパにおける日本人と中国人のイメージ――東アジアの異文化へのヨーロッパ人たちのさまざまなアプローチの比較スケッチ―― Das Bild von Japanern und Chinesen im frühneuzeitlichen Europa: Eine Vergleichsskizze zum unterschiedlichen Zugang der Europaer zu den ihnen fremden Kulturen Ostäsiens」を行った。なお、大阪市立大学の和田卓朗教授の手により行われた講演の翻訳が、『法学雑誌（大阪市立大学）』48 巻 1 号（2001 年）に掲載されており、本論文の訳出にあたり大きく参考にさせていただいた。

原文の註では、史料からの引用がしばしば見られたが、本文中でもその引用文が示されているものについてはあえて訳出せず、原語のままとした。また［ ］の語句は訳者が補ったものである。

本論文は多言語史料に依拠して立論が試みられており、その訳出は近代イギリス史を専門とする訳者の能力を大きく超えるものであった。したがって、訳出の過程では、大阪大学大学院文学研究科西洋史研究室の院生諸氏に教示・助言をいただいた。また、訳稿の改訂にあたり同研究科、藤川隆男教授に多大な労力を払っていただいた。記して謝意を表したい。

---

(122) Linschoten, *Itinerario*, 120:「ここでは宗教は中国のものとほぼ同じである Haer religie is by near gelijck die van Chinen」。むろんこの主張は仏教にしか当てはまらない。

(123) 「かれらはイスラーム教徒と同様に、床に座り、中国人と同様、木片を用いて食事をする Sie essen auf dem Boden wie Mohammedaner und mit Hölzern wie Chinesen」。J. Alvarez (1547). 引用は Kapitza, *Japan* I, 64 より。